



「子どもを認め、 寄り添う」とは

子どもたちのなかには、友だちを傷つける言葉を言ってしまう子、友だちを叩いてしまう子、
何をするにも「どうせできない」とつぶやく子、理由を言わずに部屋を出て行く子など、
さまざまな気になる姿を見せる子どもがいます。

その子はどんな思いをもっているのでしょうか。

その思いをつかむには、どうすればよいのでしょうか。

今年度の人権保育プロジェクト会議では、「『子どもを認め、寄り添う』とは」をテーマに、
気になる姿を見せる子どもへのかかわりについて「紙芝居づくり」とおして考えてきました。

作成した紙芝居に登場する子ども、保護者、保育者との出会いをとおして、
「子どもを認め、寄り添う」ということについて一緒に考えていきましょう。



2020年度人権保育プロジェクトチーム作成「紙芝居」目次

- 【1】 「きづいてくれて ありがとう」 P 1
- 【2】 「ほんとうはね」 P 3
- 【3】 「ニコニコだいさくせん」 P 5
- 【4】 「さ・か・あ・が・り」 P 7
- 【5】 「いっしょにあそぼ」 P 8



2020年度人権保育プロジェクトチーム作成「紙芝居」の紹介

【1】「きづいてくれて ありがとう」



(1)紙芝居をととして伝えたいこと

<子ども・おとなに>

- 言葉にはできなくても、子ども(友だち)の心のなかにはわかってもらいたい本当の気持ちがあること
- 子ども(友だち)の行動だけを見て善し悪しを判断するのではなく、「どうしたのだろう?」と考えることが大切だということ

(2)登場人物

○けんた(5歳児クラス)

両親は忙しく、保育は平日、土曜日の早番から遅番までである。家でさみしい思いをしている。思いを伝えることが苦手な子。自分の思いがとおらないと叫んだり、怒ったりすることが多い。

○たけし(5歳児クラス)

○保育者



(3)ポイントとなるシーン

○たけしは、けんたのことを「いつも部屋を出て行ってしまう子」と決めつけていたが、保育者の話を聞いて、けんたの本当の気持ちに気づく。その後たけしは、けんたの思いに寄り添おうとする。

(4)紙芝居「きづいてくれて ありがとう」



ある日、給食を食べている時に、エビフライのしっぽを噛んでしまい、骨を食べたと思ってびっくりしたけんたさん。早く口から出したくて、泣きそうになりながら「先生! 骨噛んじゃった!!」と言いました。先生に「しっぽかな? ティッシュに出してきていいよ」と言われ、けんたさんは、ティッシュを取りに行きました。



けんたさんが「ティッシュ、ティッシュ…」と、ティッシュを取りに行くのを見て、たけしさんは、けんたさんが食べている途中で席を立ったと思い、「あー! けんたくん、ごはん中は立ったらあかんよ!」と注意しました。



<線まで紙芝居をぬく>

けんたさんは(ちがうのに…骨噛んじゃったのに…ぼくはこんなに大変なのに、どうして怒るの!? 悲しい…!!)と、本当の気持ちを言葉にできず、

<全部紙芝居をぬく>

「うわーん!」と、部屋を出て行ってしまいました。

周りのお友だちは「先生! またけんたくんが出て行っちゃったよー! ダメだよねぇ」と、「いつも部屋を出て行ってしまう子」と決めつけてしまっています。



家でもさみしい思いをしているけんたさん。昨日もお母さんは帰ってくるのが遅く、遊んでももらえませんでした。誰にも気持ちを分かってもらえないけんたさんは、一人ぼっちと思っています。(ママもパパも遊んでくれない。骨を噛んじゃって、ぼくはびっくりしただけなのに、友だちは分かってくれない。また部屋を出て、ダメだねって言われるし。みんなに、つらい、悲しいって気持ちをわかてもらえないから出て行ったのに。あーぼくはもう一人ぼっちだ…)とけんたさんは思いました。



そこへ、先生がそばに来て言いました。

「けんたさん、悲しかったね。骨噛んじゃったのにみんなに怒られて、また出て行ったって、決めつけられて、嫌だったね」





けんたさんと一緒に部屋に戻った先生は、みんなに話しました。
 「みんな。けんたさんは、エビフライのしっぽのところが噛んじゃって、びっくりしたんだよ。だからティッシュにそれを出したかっただけなんだよ。だけど、ごはん中に立つのも、のどに詰まったりして危ないよね。たけしさんも、教えてくれてありがとうね」
 その話を聞いたたけしさんは、(そうだったんだ。ぼくもこの前、お家でお魚を食べた時、骨が刺さってびっくりしたなあ。けんた君も、びっくりした気もちだったよなあ…)と、自分も同じようなことがあったのを思い出しました。



またある時、年長さんが外で泥団子を作っているのを、後ろで見ていたけんたさん。
 (いいなあ。ぼくも作りたいなあ。すごいツルツルしてかっこいいなあ。どうやって作るんだろう…)泥団子がとても素敵だったので、作りたくなったけんたさんは、どうやって作っているのかを知りたくて、触ろうとしました。



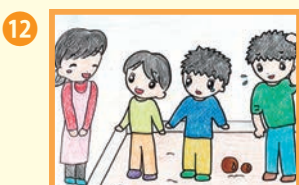
年長さんは、自分の泥団子を取られると思い、「あー！こいつ、俺の泥団子取ろうとしてるー！泥棒や！先生に言うたからな」と、けんたさんを怒鳴りつけました。
 (えっ…ちがうのに…。すごくきれいだったから、ちょっと触ってみたかったんだ…。取ろうとしてないよ。ぼくも作りたかったんだよ…)本当の気もちをうまく言えないけんたさんは、また悲しくなりました。



けんたさんは、(また怒られた。ぼくはいつも怒られる。悲しい…。誰もわかってくれない)と思い、「うわー！！ママー！」と泣いていると、たけしさんがそばにきました。
 「けんたくん、どうしたの？」年長さんに怒られていたのを見ていたたけしさんは、けんたさんに優しく話しかけました。



泥団子を見たたけしさんは、「あ、もしかしたら泥団子を作りたかったの？ぼくも作りたい！一緒に作ろう！」と、けんたさんを誘いました。



たけしさんは「先生！けんたくん、泥団子作りたんだって！僕も一緒に作りたい！」、言いました。先生は「あら！すてきな泥団子だね。けんたさん、これが作りたかったんだね」「たけしさん、教えてくれてありがとう」と言いました。
 年長さんは「なんだ。泥団子を取ろうとしたんじゃないかな。悪かったよ。ごめんな」と謝りました。



(ぼくの気もちわかってくれたんだ！嬉しい！)
 本当の気もちを、友だちや先生がわかってくれて、けんたさんはとても嬉しくなりました。
 こうしてけんたさんは、みんなと楽しく泥団子を作ることができました。
 みんなも、お友だちの気もちに気づいてあげられるといいですね。

おしまい

(5)紙芝居をみた保育者の感想等

- 本当の思いを伝えられない子が、自園にもどれだけいるだろうか。子どもの表面的な行動、姿だけを見るのではなく、心の奥の気もちをわかろうとすることが「寄り添う」「認める」ということにつながっていくと感じた。
- 子どもたちの言葉にアンテナをはり「おかしい!」「このままじゃ…」と気づき、クラスに返していくようにしたい。その時に、「そんなことを言ったらダメ!」ではなく、「どうしてなのかな?」と一緒に考えていくことを大切にしていきたいと思った。
- どちらの思いも否定しないことで、子どもたち2人は素直になれたと思う。自分は「子どもに寄り添う保育ができているか」をふり返ることができた。



【2】「ほんとうはね」

(1)紙芝居をととして伝えたいこと

<子どもに>

○友だちに対して、決めつけた見方をしてはいけないということ

<保育者に>

○気になる子どもやその保護者に対して、「また○○さんあんなことをしている」「愛情不足だから」などと「決めつけた見方をしていないか」をふり返ることの大切さ

(2)登場人物

○たいよう

○つばさ、さくら、その他

○保育者

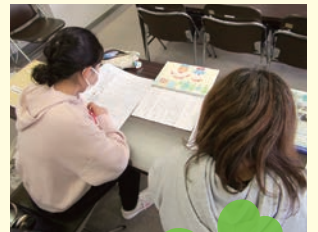
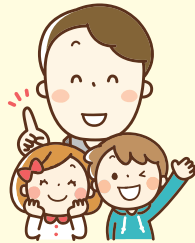
(3)ポイントとなるシーン

○「たいよう」は泣いている「さくら」を心配してそばにいるが、その様子を見た先生やみんなが「また、たいようくんが…」という決めつけた見方をするシーン。

○実際は、怪我をした「さくら」を「たいよう」が心配していて、それに気づいたみんなは「ハッ!」として、たいように対して決めつけた見方をしていたことに気がつく。

(4)紙芝居「ほんとうはね」

1



2



ここは、かがやき保育園です。今日もみんなが楽しそうに遊んでいます。
「鬼ごっこしよう!」「やろう、やろう!」「今日はブランコしようかなあ」

部屋のなかでも、ままごと遊びや積み木などでみんなが遊んでいます。そこへ、たいようさんがやってきて…。

3



ひょいっと、つばささんとさくらさんの使っていたおもちゃを持って行ってしまいました。さくらさんは「たいようくん、返してよ!」と言いました。

つばささんも「なんで勝手に取っていくの?」と言いました。

2人は怒って、言いましたが、たいようさんはおもちゃを持ってどこかへ行っていました。

つばささんは「たいようくん、いつもおもちゃ取ってくる」、

さくらさんは「たいようくん、嫌だなあ…」と困った顔です。

4



今度は、みんなで鬼ごっこをしていると…。

「痛いなあ!たいようくん、何するの!」

「先生!たいようくんがー!」

すると、その様子を見ていたつばささんとさくらさんが

「また、たいようくん、お友だち叩いてる!」

「やっぱりいじわるする。もう、あっち行って遊ぼう!」と言いました。

そして、みんなはどこかへ行っていました。

5



たいようさんは

「あ〜あ…。また、みんな怒っちゃったなあ…。一緒に遊びたかったのになあ…。どうしてかなあ…」と、言いました。

周りのみんなも「たいようくん、どうして叩くのかなあ」「怖いなあ…」

と、戸惑っていました。

どうしたら、みんなで仲良くできるのでしょうか?

6



先生は、「おもちゃを貸してほしい時は、貸してって言おうね」
「本当は一緒に遊ぼうって言いたくて、でもうまく言えなかったんだね」と話しました。
たいようさんは、本当はどうしたかったのか、そしてまわりの子はどう思っていたのかなど、どちらの気持ちも相手に伝えられるように、一緒に考えたり話したりしました。

7



そんなある日。
「うわぁ～ん!」さくらさんの大きな泣き声が聞こえ、みんなが集まってきました。
先生も声を聞きかけつくと、そこには、また、たいようさんとさくらさんがいました。
「さくらちゃんどうしたの?大丈夫?」「あっ!また、たいようくんがいじわるしたんだ!」と集まってきたつばささんたちに言われたたいようさんは困っていました。
本当はね…

8



さくらさんが怪我をしているのを見て、心配したたいようさんが、さくらさんに声をかけている所だったのです。先生もみんなもハッ!としました。

みんなは、たいようさんのことを『いつも叩く子』『物を取ってくる怖い子』などと思っていたましたが、本当は優しくてみんなと仲良くなりたかったことが分かりました。

9



(※この紙芝居を保育者に向けて読む時は、このページも読む)

この日のことを先生は、たいようさんのお母さんに話をしました。すると、お母さんは「たいように、どのようにかかわってあげればいいのかわからず、悩んでいたんです」と話してくれました。

先生もたいようさんのことを、お母さんにどのように伝えようか悩んでいたことを話しました。
お母さんも先生も、自分の気持ちを話すことができて、心のなかが少し楽になりました。
先生は、保護者と一緒に子どものことについて考えていく大切さにも気がつきました。

10



お互いの気持ちを知り、友だちの優しい姿に気づくことのできた、たいようさんたち。

「たいようくん、遊ぼう!」

「うん!次、僕の番だね!」

今日も、かがやき保育園は、子どもたちが元気いっぱい楽しく遊んでいます。

おしまい

(5)紙芝居をみた保育者の感想等

- 優しい一面や「友だちと遊びたい」という思いをもつたいようさんと、周りの子どもたちとをつなげる「なかまづくり」を大切にしたいと思った。
- 子どもたちは、私たちの「小さな声かけ」も聞いている。「また」「いつも」のような表現をすることで、決めつけた見方へとつながってしまう。
- 差別につながる可能性があるできごと等に気づけるアンテナをもっていたい。



【3】「ニコニコだいさくせん」



(1) 紙芝居をととして伝えたいこと



<子どもに>

- 保護者は、仕事や家事等をして自分の生活を支えてくれていること
- 保護者は、自分のことを大切に思ってくれていること
- 「嬉しいこと」や「楽しいこと」だけではなく、「困ったこと」や「悲しいこと」も、自分の周りのおとなに伝えてもよいということ

<保護者に>

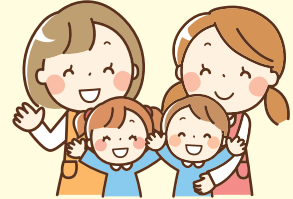
- 日々の忙しい生活のなかでも、子どもとかかわることの大切さ

<保育者に>

- 生活背景をつかんだうえで、子どもや保護者に言葉がけや働きかけをしていくことの大切さ
- 保護者には、それぞれ忙しい状況や生活があることに気づくことの大切さ

(2) 登場人物

- はる: 思ったことを言葉で表現しにくい。
- 母: 仕事や家事に大忙しで、時間や心にゆとりがない。
- 保育者



(3) ポイントとなるシーン

- 自分の思いを言葉で表現しにくかったはるが、保育者の仲立ちによって、思いを母に伝えようとするシーン。
- 忙しい自分(母)に気づかい、「聞いてほしいことがあったが言えなかった」はるの思いに、母が気づくシーン。

(4) 紙芝居「ニコニコだいさくせん」



はるさんのママは、朝から大忙しです。
洗濯物を干したり、ごはんを作ったり、お掃除をしたりしています。
だから、はるさんはちょっぴりさみしいけれど、ひとりで朝ごはんを食べています。
ママ:「あー忙しい。え! もうこんな時間。保育園に行くわよ。早く車に乗って!」
はる:「はあい…」



はるさんは、保育園に行く時に「今日は積み木でお城をつくること」をママにお話しようと思っていました。
はる:「ねえ、ねえ、ママあのね…」
ママ:「え、なに? 今、電話中だからあとにしてくれない」
はるさんは、ママの電話が終わるのを待っていたけれど、電話が終わるころには、もう保育園に着いてしまいました。



ママ:「じゃあ、いってらっしゃい」
はる:「…」
ママは、不思議そうにはるさんの顔を見たけれど、はるさんは怒っていました。
はる:「ママにお話を聞いてもらいたかったな…」





いつもはあまり怒らないはるさんに、保育園の先生が心配して声をかけました。
先生：「はるくん、どうしたの？」
はる：「ママが、お話を聞いてくれなかったんだ…」
先生と話していると、はるさんの目からはいっぱい涙が出てきました。



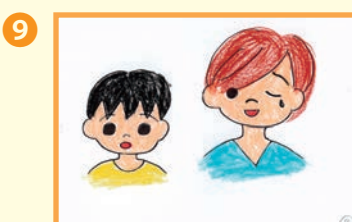
先生：「そっか…。ママに伝えなかったんだね。でも、ママは、おうちのことやお仕事のことで大変だったのかもしれないね」「ママも、はるくんも、みんながニコニコ笑顔になれるようにするには、どうしたらいいかな？一緒に考えてみようか」
はる：「うん」



夕方、ママが迎えに来てくれました。
はるさんは、ママに抱っこしてもらいたくて走って行ったけれど、ママは忙しそうにしている抱っこはしてもらえませんでした。
ママ：「さあ、帰ろう」
はる：「…」



すると、そこへ先生が来ました。
先生：「お母さん、あのね。今日、保育園ではるくんがね…」
先生は、はるさんと話したことを、ママに伝えてくれました。
先生：「さあ、はるくん、ママに聞いてもらおう」
と言って、はるさんの背中をそーっと押しました。



はる：「ママ、あのね…」
ママ：「どうしたの？」
はる：「ぼくね、朝ママに聞いてほしいことがあったんだ…」
ママ：「ん？何だったのかな？」
はる：「いいの。ママ忙しそうだから…」
ママ：「ごめんね。聞いてあげられなかったね」
はる：「ママは、いつもおうちのことや、お仕事のことで忙しいよね。でも、いっぱい頑張ってくれているんだよね。これからは、ぼくもお手伝いをするよ。だからその時に一緒に話しよう」
はるさんがそう話すと、ママはちょっぴり目に涙を浮かべて、ギューッとはるさんを抱きしめました。



ママ：「そうだね。ママは頑張りすぎて、さみしい思いをさせちゃっていたね。これからは手伝ってもらおう。よろしくね」
はるさんは、ちょっぴり照れくさくそうでしたが、ママにそう言うてもらおうと嬉しくなって笑っていました。
ママも、そんなはるさんの顔を見ていっぱい笑っていました。



それからは、おうちでママのお手伝いをしながら、いっぱいお話をしています。
はる：「ママの笑った顔が、だーいすき！」
ママ：「ママもはるくんの笑っている顔が、だーいすき！はるくんがいてくれるだけで、ママは元気がでるよ。ありがとう」
はる：「やったー。ぼくとママは、おんなじ気持ちだね」
はるさんと先生が考えた『ニコニコだいさくせん』は、大成功！

おしまい

(5)紙芝居をみた保育者の感想等

- 子どもの本当の気持ちや普段から探って、理解することができる保育者でありたいと思った。
- 家庭の背景を把握し、保護者の思いやしんどさに気づいていきたい。
- 子どもの気になる姿を「家庭のせい」にするのではなく、自分に何ができるのかを考えていきたい。
- 保護者に対して「なんでもっとこうしてくれないの？」と否定的に見ることが多かった。子どもへのかかわりの背景にある保護者の思いをつかみ、共に考えていける関係になっていきたいと思った。

【4】「さ・か・あ・が・り」



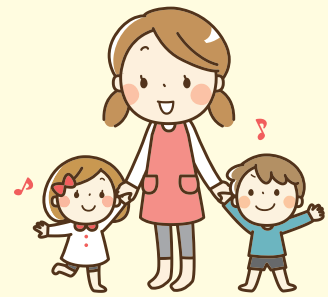
(1) 紙芝居をととして伝えたいこと

<子どもに>

- 「『やってみよう』と挑戦することは素敵なこと」だということ
- 自分のことを大切に思ってくれている人がいるということ

<保護者・保育者に>

- 「できる」「できない」ではなく、子どもの「がんばり」や「楽しんでいる様子」など、ありのままの姿を認めることの大切さ



(2) 登場人物

- たろう(年長):初めてのことに苦手意識があり、自信がない。やってみようとする意欲はもっている。
- 保育者:子ども一人ひとりの姿を認めることを大切にしてきた。子ども同士も認め合う関係づくりをめざしている。
- さくら:たろうとよく遊び、たろうのことを気にかける姿がある。

(3) ポイントとなるシーン

- 「がんばりまめ」「たろうの心が温くなる」シーン。自分のことを「見てくれている」「認めてもらった」という経験が、自信につながり、意欲につながっている。そのことは、その子が、まわりの子の頑張りにも気づき認めることにつながっている。
- 最後のシーン。子どもに「何度も挑戦することのすばらしさ」を伝えたいと思い、さかあがり「できた」ではなく「大好き」で終わることにした。

(4) 紙芝居「さ・か・あ・が・り」

1



2



運動会前のある日…鉄棒に取り組むらいおん組

子A:「さ・か・あ・が・り」

子B:「すごーい!! さかあがりできてる」(感心して)

ところがその様子を見ていたたろうさんの顔はくもっていました。(悲しそうに)

3



たろう:「さかあがりやってみたい! でも、できるかな・・・どうせできないんだろうな」(自信なさげに)

4



そんなたろうさんに、保育者が話しかけます。

保育者:「たろうさん。一緒にさかあがりやってみようか!」(優しく)

たろう:「う・・・うん・・・」(自信なさげに)

5



たろうさんは、さかあがりに何日も挑戦しました。

たろう:「やっぱりできないよ・・・」(諦めたように)





6 たろうさんが鉄棒をする様子を近くで見ていたさくらさんが「たろうさん、どうしたの??」と心配そうに言いました。
たろうさんは「さかあがりがんばりできない!!」と悲しそうに言いました。
「そっか。明日また一緒にやってみよう」(優しく)二人はそっと手をつなぎました。
「ん?たろうさんの手に何かある?」(不思議そうに)さくらさんは、何かに気がつきました。
「せんせーい!たろうさんの手に何かできてる!!」



7 保育者:「これは、がんばりまめだね。さかあがり毎日頑張ってたからできたんだね」
さくら:「ほんとだ!がんばりまめ!!」
子A:「たろうさんが頑張ってたの見てた!」
子B:「わたしも知ってる。毎日さかあがりしてたもんね!」
周りの子どもたちも集まって来ました。
「何回も挑戦するたろうさんって素敵だね!」と保育者が言いました。



8 たろう:「みんなぼくのこと見てくれたんだ」「嬉しいな!」(嬉しそうに)
たろうさんは、心が温かくなりました。



9 その後もたろうさんは、友だちと一緒に鉄棒をしました。
たろうさんは、鉄棒が大好きになりました。



おしまい

(5)紙芝居をみた保育者の感想等

- 何度も挑戦したことでできた「がんばりまめ」を認めるところに心が温かくなった。子どもの自信や意欲につながっていく言葉だと感じた。
- 何事も「できる」「できない」で判断するのではなく、その過程を認めていきたい。
- 苦手なことに挑戦している友だちを認められているクラス。「できなくても」、頑張っているところを認めてくれることの嬉しさが表現されている。
- その子の挑戦する姿を大事にする保育をしたいと思った。

【5】「いっしょにあそぼ」

(1)紙芝居をととして伝えたいこと

<子どもに>

- 「友だちに認めてもらうこと」の嬉しさ

<保育者に>

- 保育者が子どものタイミングを見計らい、声掛けをしたり環境設定を整えたりすることの大切さ

(2)登場人物

- ゆう:自分の気もちを素直に出せない。自信がないと参加しないが、自信がつくと参加する。
- ひろ先生:クラス全体を見てしまい、個々の対応がまだ難しい3年目の先生。
- 友だち:ゆうのことを「いつもみんなと一緒に遊ばない子」「話をしても『イヤ』『やらない』ばかりでつまらない子」と決めつけている。

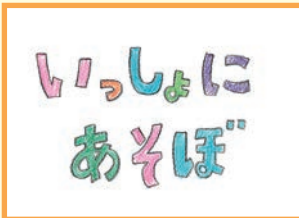
(3)ポイントとなるシーン

- みんなの気もちを聞いて「みんなも一緒なんだ」とゆうが気づくシーン。
- ゆうが大好きな給食の時間に、心を開こうとひろ先生が頑張るシーン。



(4)紙芝居「いっしょにあそぼ」

1



2



ゆうさんは、さくら保育園のさくらんぼ組さん。みんなと一緒に遊びたいのに、「一緒に遊ぼう!」って言えなくて、友だちに誘われても「一緒に遊ぼう!」って言われても素直に「うん」と言えない子。

ある日、担任のひろ先生は、みんなに聞きました。

ひろ先生:「今日は、何して遊ぶ?」

子どもたち:「ドッジボール!」

と、子どもたちの元気な声が返ってきて、みんなで、ドッジボールをすることになりました。

3



園庭に出ていったさくらんぼ組さん。でも、ひとりだけ園庭のはしっこで、ドッジボールをやろうとしない、ゆうさん。

ゆう: (心の中の声)「やりたいけど、うまくとれないと嫌だしな…」と心の中で思っていました。

クラスの友だちは、「ゆうさん、いつもやらないもんね」と、ドッジボールに夢中です。

ひろ先生は「どうしたらいいのかなあ…」そんなゆうさんのことが、ちょっぴり心配です。

4



—給食の時間—

ひろ先生:「ゆうさん、一緒に給食食べよ」

ゆう:「えっ!?…いいよ」

ひろ先生:「ゆうさんはさあ、エビフライのしっぽ食べる?」

ゆう:「エビフライのしっぽ、食べたらダメでしょ?」

ひろ先生:「ひろ先生は、しっぽ食べちゃうよ」

ゆう:「えー!?!」

ひろ先生は、給食のことや、ゆうさんの好きな食べ物のことなど、いっぱいお話をしました。

ひろ先生:「ゆうさん、今日、ドッジボールやってなかったね」

ゆう:「あっ、う…うん」

ひろ先生:「どうしたの?」

ゆう:「本当はやりたかったんだけど…」

と話し始めたゆうさん。ボールがうまくとれないことや、あたってしまった時に、友だちに何か言われたりしないか心配だったことなどを話してくれました。

ひろ先生:「そっかあ。本当のことを教えてくれてありがとうね。今度、先生と練習してみようか」

給食の後に、ゆうさんとひろ先生は、ボールを投げたり、受けたりする練習をしました。ゆうさんの嬉しそうな顔を見て、ひろ先生は、みんなに話したくなりました。

5



次の日。

ひろ先生は、さくらんぼ組のみんなに、ゆうさんが本当はドッジボールがやりたかったこと、うまくボールが受けられないことを話しました。

すると…。

めい:「私もうまく受けられないよ」

あけみ:「ボールあたると痛いよね」

けん:「でもさあ。みんなでやると楽しいよね」

と、クラスの友だちも話し始めました。

ゆう: (心の中の声)「みんなも一緒だったんだ」

ゆうさんは、みんなと自分も一緒だったことにほっとしました。



6



次の日。

園庭でドッジボールをやっていると、ゆうさんがやってきました。

たい：「ゆうさん、一緒にやろ！」

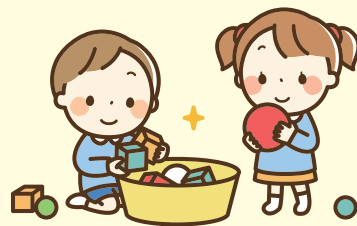
ゆう：「う、う…ん」

けん：「やろ!!やろ!!」

「ゆうさん、こっちのチームね」

ゆう：「う、う…ん」

あけみ：「負けないよー」



7



ゆうさんも一緒にドッジボールを始めました。

みんなと遊んでいるうちに、ゆうさんは、どんどん笑顔になりました。

それを見ていたひろ先生もニコリ。とても嬉しくなりました。

8



ドッジボールが終わって、給食の用意をするゆうさんの顔は、今までで一番のキラキラな笑顔でした。

おしまい

(5)紙芝居をみた保育者の感想等

- 苦手意識がある子を、「どのようにその場に誘うか」と悩むことが多い。子どもとの信頼関係をつくるために、言いやすい環境や雰囲気をつくるのが大切だと感じた。
- 子どもの姿に気がつくだけで終わらず、その子の思いを理解したうえで、かかわっていく保育者の姿が素敵だった。
- 子どもへのかかわりを大切に、子どもが心を開いて自分の思いを話せる関係づくりをしていきたい。
- ゆうさんがドキドキしているドッジボールの時間でなく、ホッとする給食の時間に、先生が一对一でかかわったことで、心がほぐれたと思う。話しやすい時間を作ることの大切さが表現されている。

プロジェクトのメンバーによる振り返り

絵が苦手なので「紙芝居」と聞いたときには、正直不安しかなかったのですが「子どもに寄り添う、認める」ことについて深く考え、自分を高めることにつながったと思っています。

でも、ここで終わるのではなく、ここを始まりとして、これからも子ども一人ひとり、保護者の思い、背景を捉えながら保育をしていきたいと思いました。

日々の保育に追われ、「個々の子どもにどれだけ寄り添っているのか」と振り返ると反省することが多いですが、一人で考えるのではなく、他の職員と考えながら保育をしたいと思いました。人権保育プロジェクト会議に参加して、自園の他の職員と話す機会が多くなったと思います。今後も職員間連携を図っていききたいと思います。

紙芝居作りをとおして、自分の保育、自園の子ども、おとな（保護者、保育者）の姿を振り返り、考えることができました。日々の子どものなかかわりのなかで、差別の芽につながる“決めつけ”や“偏見”に気づける自分でありたいと思います。

子どもは「自分を認めてもらえた」という経験を積み重ねていくことで、まわりの友だちの思いに気づき、認め合っていけるようになると思います。そのために、まず、子どもの周りにいる私たちおとなの行動、見方はどうかを考えていきたいです。

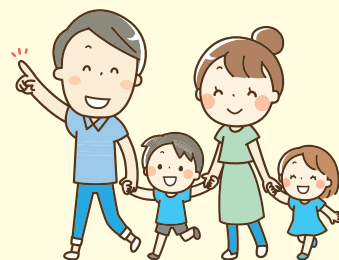
「子どもを認め、 寄り添う」

2020年度、三重県人権保育実践研究プロジェクトとして初めて、紙芝居の作成を試みました。従来、三重県人権保育実践研究プロジェクトでは、リーフレットを作成し、研究成果を発信してきました。同時に、分かりやすく、研修等でも活用のしやすいリーフレットづくりをめざしてきました。今回は、より分かりやすく、そしてより活用しやすい

形でということで紙芝居を作成しました。紙芝居という形で、子どもの人権にかかわることを表現することで、活用の幅が広がるのではないのでしょうか。

さて、2020年度のテーマを「子どもを認め、寄り添う」としました。「子どもを認める」や「子どもに寄り添う」は、よく聞かれる言葉でもあり、子どもにかかわる人がみな大事にしている言葉です。しかし、「子どもを認めるってどういうこと?」、「子どもに寄り添うってどういうこと?」と問われたとき、明確に答えにくい言葉でもあるのではないのでしょうか。2020年度の三重県人権保育実践研究プロジェクトでは、「子どもを認める」、「子どもに寄り添う」について、踏み込んで考えてみました。「できる」「できない」といった特定の見方で子どもたちを見ていないだろうか、子どもたちの背景に心を砕けているか(=ケアリング)といった点が、考えた点です。

どうすることが「子どもを認め、寄り添う」ことなのか、定まった答えがあるわけではないでしょう。今回の紙芝居や、リーフレットが、一歩踏み込んで考えるきっかけになれば幸いです。



人権保育プロジェクト アドバイザー 鈴鹿大学短期大学部 長澤 貴



公益社団法人三重県人権教育研究協議会

<https://www.sandokyo.jp>

○5つの紙芝居のデータは、公益社団法人三重県人権教育研究協議会のホームページの「人権保育情報」からダウンロードできます。



○リーフレットのバックナンバーは、公益社団法人三重県人権教育研究協議会のホームページからダウンロードできます。

- ▶2006年度 / 「節分・雛祭りを人権保育の視点で考える（中間報告）」
- ▶2007年度 / 「節分・雛祭りを人権保育の視点で考える（最終報告）」
- ▶2008年度 / 「いじめ対応の根っこにあるものは？」
- ▶2009年度 / 「多文化共生から人権保育を考える①」
- ▶2010年度 / 「多文化共生から人権保育を考える②」
- ▶2011年度 / 「多文化共生から人権保育を考える③」
- ▶2012年度 / 「多文化共生から人権保育を考える④」
- ▶2013年度 / 「自尊感情を育むには…」
- ▶2014年度 / 「自尊感情を育むには・・・②」
- ▶2015年度 / 「あそぼう！つながろう！～心をつなぎ合う意図的なふれあい活動をどのように展開するか～」
- ▶2016年度 / 「ともに育ち合う保育～『障がい児共生保育』の視点から考える～」
- ▶2017年度 / 「ともに育ち合う保育～保護者とともに～」
- ▶2018年度 / 「乳児期からの人権保育～1歳の生活から考える～」
- ▶2019年度 / 「乳児期からの人権保育～2歳の生活から考える～」

